



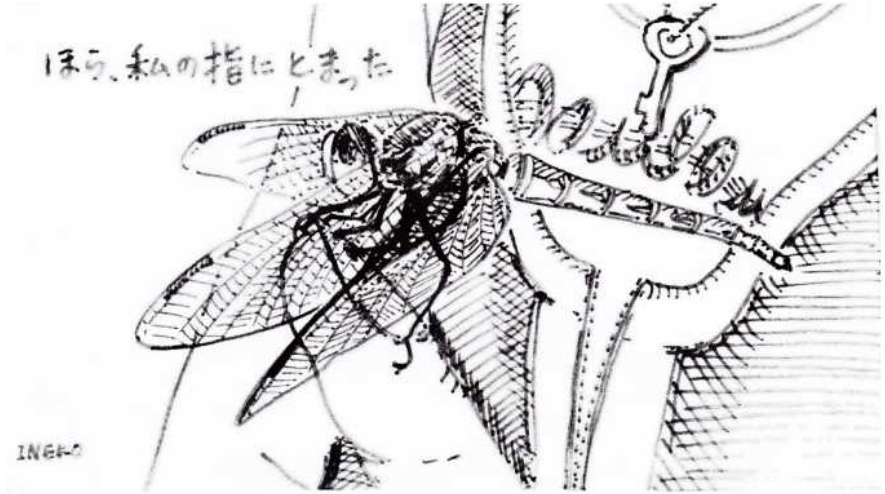
2005年 8月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

2005年8月
第 51 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

点字から識字までの距離（47）（知的障害の方への図書館サービス） 墨字訳サービスと来館によるサービス（2）（山内 薫）	・・・ 1
漢文のページ	・・・ 5
酔夢亭読書日記（11）（安田 章）	・・・ 7
ダチョウに乗った話（賀川 友吉）	・・・ 9
<差別語・不快語>考（3）（岡田 健嗣）	・・・ 11
ご報告とご案内	・・・ 17

点字から識字までの距離 (47)

知的障害の方への図書館サービス (7)

墨字訳サービスと来館によるサービス (2)

山内 薫(墨田区立緑図書館)

さて多くの知的障害の方が来館して下さるようになりましたが、そうした方々にとって図書館がどういう場となっているのかを整理して考えてみたいと思います。

(一) 社会参加の場となっている。そして何よりも楽しめる場になっている。

ふれあいセンターの利用者のなかには土曜日や日曜日に図書館に来て下さり、半日近く過ごしていく人も出てきました。

図書館では窓口で対応するだけではなく、積極的に三階にある事務室に来てもらい、いろいろな話を聞いたり、事務用のテープレコーダーでテープを聴いてもらったりしています。おそらく皆さんにとって、全くの自由意志で好きな時に行つてテープを聴いたり話ができる場というのは、そう多くはないと思います。

事務室では障害者サービスの担当職員だけでは

なく、館長をはじめとするすべての職員が会話に応じていますので、そうした意味でも気軽に来館できるのだと思います。なかには音訳用のマイクを握って歌謡曲を歌い始めてしまったり、演説の真似事をする利用者などありますが、事務室の中ですの、多少の音声は大丈夫です。そうした時の利用者の顔は本当に楽しそうです。

先日もU君が来ましたが突然館長の席に座つて、「U館長、U館長」と自分の名前に館長という言葉をつけて、とてもご満悦でした。彼の本当に心底うれしそうな顔を見るとこちらもうれしくなりますし、図書館という場が楽しみの場であつて、一つの社会参加の場になっているのだと強く感じます。

(二) 個人として受け入れられる場、自分の興味や関心に沿つて自由に話したいことを話せる場になっていて、様々な要望を出すことができる。

先にも述べましたが、窓口などで大きな声で話をするや他の利用者から「うるさい」などと咎められることもありすが、事務室では多少大きな声で話しても大丈夫です。

またどの職員もちゃんと話を聞いてくれること

も大きいと思います。ですから話のなかで様々な要望を出してくれるようになります。それは資料のことであつたり、買いたいものの相談であつたり様々です。時には買った商品を持ってきて使ひ方の相談をしたり、事務室でその品物を使つて作業をしたりすることもあります。(例えば毛糸でマフラーを編む織り機など)

また、多くの方が図書館に来館すると職場やすみだ教室などの近況をよく話をして下さいます。話したいことをたくさん抱えているにもかかわらず、聞いてもらえる相手や場所がほとんどないので、図書館に来て喜々として話をして下さる姿は本当に生き生きしています。

ある人はもう何十回も海外旅行に行つていますが、その都度ツアーのパンフレットを見せてくれたり、写真のたくさん載つた旅行関係の本を持つてきては、写真を示しながらそこに行つた時の様子なども話してくれます。

電車の好きなK君は最近の総武線の新しい車両のことから鉄道模型のことまで事細かに説明してくれます。前号にご紹介したすみだ教室の五く六人の仲間たちもそれぞれに興味や関心が異なりますから、お互いに共有できる話題が限られていて

思う存分話をすることができないようです。そうした点で、私たちが聞き役になると、とても詳しく話して下さいます。

(三) 社会との関わり方の接点になつてゐる。
(手紙の代筆や意思表示カードの作成、電話の代替など)

前号でご紹介した手紙の代筆、あるいは軽い言語障害があるために、ふれあいセンターの食堂やファミレスなどで相手になかなか話している内容を理解してもらえない方のための意思表示をするカードの作成、さらに電話を替わつてかけるなど、利用者が社会と関わり合う上でのいわば接点になつてゐると感ずることがあります。

また時には三人四人の利用者の方が図書館の事務室で鉢合わせするなどということもあり、利用者同士のふれあいの場にもなることがあります(はじめの頃はお互いの場にも悪く、ある人が事務室に入ると入つてこない方もいたりしました)。最近はそうしたことが減りました。

作業所にしても普通のお店にしてもなかなか自分の思うような要望を出しにくかったり、受け入れられなかったりすることが多いなかで、社会に

対して思ったり考えたりしたことを発信していくためのワンステップの場に図書館がなればと思っています。

(四) マルチメディア・デিজリーなど特別な資料に触れることのできる場。

来館した方には、この連載の(三二)(三三)で取り上げたマルチメディア・デিজリー図書など新しい資料を積極的に紹介しています。

例えば日本障害者リハビリテーション協会が作成したマルチメディア・デিজリー図書「赤いくつある愛の物語」(ヤングアダルト向きの写真絵本)は、もともとスウェーデンで出版されたLLという「読みやすい図書」で、知的障害者を主な対象とした本ですが、そのテキストと各ページの写真とテキストを音声化したものがパソコンで同時に見られます(「読みやすい図書」についてはこの連載の(二二)で取り上げています)。

画面上に表示されたテキストは、文字の大きさを変えることもでき、現在音声で読んでいる部分が黄色いバックライトで表示されるようになって

います。

こうした新しい資料はまだほとんど市販されていませんが、来館した利用者には図書館のパソコンを使って積極的に見てもらうようにしています。

この「赤いくつ」は三二画面、二〇分余りかかるラブストーリーですが、今までに見てもらった十人近くの利用者の中、途中で見るのを止めてしまった人は一人だけで、あとの人は皆最後まで見てくださいました。何人かの利用者にとっては恐らく生まれて初めて自分で読み通した本なのではないかと思えます。

「赤いくつ」が入っているCD-ROMには他にもいくつかのマルチメディア・デিজリー図書が入っていて、Uさんには「バースデーケーキができたよ」という絵本をマルチメディア・デিজリー図書にした作品も見てもらいました。

一年以上経って、新しく入手したマルチメディア・デিজリー図書をUさんに見てもらおうとしましたら、以前見た「バースデーケーキができたよ」のことを覚えていて、「バースデーケーキの



でてくるのは？」と聞かれました。一年以上前に見たマルチメディア・デイジー図書を覚えていて、ということとは余程印象が強かったのだらうと思います。

最近「三匹の子豚、マツチ売りの少女、ごん狐、蜘蛛の糸」の四つの作品が入ったマルチメディア・デイジー図書をUさんに見てもらいましたが、文字を拡大するとテキストの画面が大きくなるために挿絵が半分以上消えてしまうという不具合を見つけましたが、これもUさんが絵が見えなくて「おかしいよー」と云ってくれたことで発見できた事です。

一般の本という形態ではなかなか馴染みにくい方でもマルチメディア・デイジーという媒体ですと抵抗なく読書を利用して下さる方が多いようです。このデイジーはやはりこの連載の(一五)で取り上げたディスレクシア(読み書き障害)の子どもにとって非常に効果があることが実証されようとしています。

最近出た本にも次のような記述が見られました。「最近、井澤さんは家庭での学習用に視覚障害者用ソフト『DAISY』を使って歴史の教科

書をCD-ROM化した。『DAISY』はパソコンの画面上に、教科書が一ページずつ現れ、内蔵スピーカーからは教科書を朗読する声が聞こえ、読んでいるところの文章が学習者にとってわかりやすいように、段落ごとに黄色く反転する画期的なソフトだ。

このソフトを井澤さんは、息子が使いやすいうに微調整して作ってもらった。反転の色を変える、段落ごとではなくて一文ごとに反転させる、反転した場所が画面の中央部に現れるようにしてもらう……。このソフトのおかげで、拓也君の読解力と理解は大幅に進み、本人が自分でも驚くくらい勉強が分かるようになったそうだ。」(『忘れてなんかない! ディスレクシア・読む・書く・記憶するのが困難なLDの子どもたち』 品川裕香 岩崎書店 二〇〇三)

これからもこうした汎用性の高いマルチメディア・デイジー図書を機会あるごとに、様々な方々に見ていただこうと思っています。





八月十五日夜、禁中獨直 對月憶元九

中唐 白居易

銀臺金闕夕沈沈

獨宿相思在翰林

三五夜中新月色

二千里外故人心

渚宮東面煙波冷

浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不
同見

江陵卑濕足秋陰

銀台金闕||りつばな宮中の建物をいう。

夕沈沈||夜が静かにふけていくさま。

翰林||翰林院。唐代以降、詔勅などを司る官庁。

三五夜||十五夜。新月||空に出たばかりの月。

故人||ふるくからの親友。元九を指す。

渚宮||渚に臨む宮殿の意で、春秋時代の楚王の宮殿の名。友のいる江陵にその跡があった。

浴殿||翰林院の東にある宮殿の名。

鐘漏||漏は水時計。時をつげる鐘や水時計の音。

八月十五日の夜、禁中に獨直し

月に對して元九を憶う

銀台金闕夕沈沈

三五夜中新月の色

渚宮の東面煙波冷かに

猶お恐る清光同じくは見ざらんことを

江陵は卑濕にして秋陰足る

獨宿相思いて翰林に在り

二千里外故人の心

浴殿の西頭鐘漏深し

浴殿の西頭鐘漏深し

江陵は卑濕にして秋陰足る

一人宮中で宿直をする作者は、十五夜の月を眺めながら、(左遷されて)遠く江陵の地にいる友、元九を思いやる。……それにしても気がかりなのは、この清らかに輝く月を私が見ているのと同じようには見られないのではないか、江陵の地は湿りがちで秋の曇り日が多いということだから。)

この詩の第三・四句(対句)は『和漢朗詠集』に収められているほか、多くの作品に引用され親しまれてきました。

『源氏物語』(須磨の巻)では、須磨でわび住まいをする源氏が十五夜の月を見ながら、「二千里の外故人の心」と誦して、都で月を眺めているであろう親しい女性達のことを思い、涙する場面が描かれています。

※遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』(旺文社)を参照、引用させていただきます。



銀 臺 金 闕 夕 沈 沈



獨 宿 相 思 ヒ テ 在 リ 翰



林 ニ



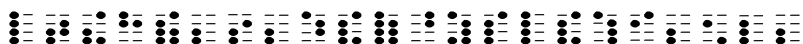
三`五 夜 中 新 月 ノ 色



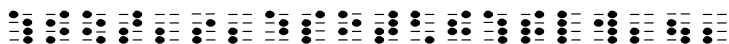
二 千 里 外 故 人 ノ 心



渚 宮 ノ 東 面 煙 波 冷 カニ



浴 殿 ノ 西 頭 鐘 漏 深 シ



猶 ホ 恐 ル 清 光 不 ランコ



トヲ 同 ジクハ 見



江 陵 ハ 卑 濕 ニシテ 足



ル 秋 陰



※「三五夜」の「三五」は、EIBRKでは「三`五」(三`五)と入力し「さんじゅうご」と読む「三五」(三五)と区別しています。

一 語法・句法 一

「不_レ同…」の形は、「おなじくハ…ず」と読み、部分否定。

「不_レ同見_レ」(同ジクハ見ず)は「同じようには見られない」。

部分否定として他に、「不_レ必…」(必ズシモ…ず)や

「不_レ常…」(つねニハ…ず)がよく用いられます。



酔夢亭読書日記 第十一回

安田 章



年中無休の酔夢亭も寄る年波の上にもろもろの心労及び暑さと不摂生がたたり、今回は掲載を休ませていただき、南の島で珊瑚の砂浜に寝そべり可愛い人魚を眺めながらのんびり暮らそうと考えていたのだが、鬼の岡田編集長が何をふざけたことをほざいているか、早く書け、と恫喝するので、今泣きながらパソコンに向かっている次第。キーボードは涙に濡れ、回路がショートしてしまうのである。



海馬の意味は「タツノオトシゴ」で、脳のその部位が「タツノオトシゴ」の尻尾に似ているからつけられたとのこと。身体の中の器官には時々、妙に空想を掻きたてられる名称がある。例えば、ランゲルハンス島なんてのもある。「ランゲルハンス島の午後」という村上春樹氏の書物もあるようだが、私は読んでいない。

人間の脳も身体も考えてみれば不思議である。

「ナンバ式快心術」(矢野龍彦、長谷川智共著)

角川書店)

「ナンバ歩き」という歩き方をご存知だろうか。

昔の日本人、明治維新前の日本人の歩き方は、右手は右足と、左手は左足と同時に出すような歩き方だったらしい。

この歩き方だと着物が着崩れしないということだ。疲れもすくないというので、時々私もためしている。効果の程は未だよくわからないが。

「ナンバ」は「難場」と捉え、生きていく中で自分が直面した難しい場面にいかにしなやかに対処していくか、どう工夫していくかを考えていく。この世はタフでないと生きていけないし、優しくなければ

「海馬」(池谷祐二、糸井重里 新潮文庫)

「記憶力を強くする」(池谷祐二 講談社ブルー

バックス)

身体は酷使すると疲労してくるが、脳はいくら使っても疲れないのだそうだ。眠っているときでも活動していて、常に元気いっぱいである。ゆえに脳力不足です、というのは弁解にならないわけで、体力不足でできませんというのが正解かもしれない。

ば生きていく資格がない。そして、楽しくなければ生きていく甲斐がない。

人間は不思議であるが、生物も不思議である。人間は生物の一種なのだから当然か。

この夏、酔夢亭の軒先にある鉢植えの蜜柑の木にアゲハチョウが卵を産み付け、十匹ほどが孵化した。孵ったばかりの幼虫は黒くて貧弱だったが蜜柑の葉をむしゃむしゃ食べるうちにきれいな緑色になっていった。さながらモスラの幼虫である。そしてある一匹が蛹になった。モスラのように糸を吐いて繭をつくるわけでなく、ただ葉っぱが丸まっただけのようだった（羽化の会のホームページにその辺りの様子を夏目秘楽利さんが描いている）。私は想像した。この緑の幼虫たちが次々に蛹となり、そして満を持して羽化し、大きな紫色の羽をひらひらさせて我が軒先から何処かへ旅立つていくことを。

しかし、虫の天敵は鳥である。ある日、雀の親子がやってきて、蛹以外全部食べてしまった。あまりに熱中して食べていたので、子雀が置いてけぼりにされ一晩を蜜柑の木の鉢植えで過ごすことになり、鳴き声がうるさくてしよなかつたが、

翌朝親雀がちゃんとつれ戻しにやってきて、その件ではほっとしたが、アゲハの方はがっかりである。

そしてある朝、玄関を開けると黒っぱいひらひらが私の脇をすり抜け、あつという間に何処かへ行ってしまった。蛹は抜け殻であったので、羽化が完了したのである。一人前のアゲハになるのも大変なことである。十分の一の確率である。

十分の一といえ、今後日本の社会は一割の勝ち組と九割の負け組に分化していくかもしれない。日本人の平均貯蓄額の高さはこの一割ほどの富裕層に引き上げられているとも考えられるだろう。一〇人がいるとして九人が貯蓄高〇で、ひとりが一億だとすれば平均は一千万であるから。

「しのびよるネオ階級社会」（林信吾 平凡社

新書）

日本は階級社会なのか、そうではないのか。階級社会とはどういうものか、悪いものなのか。戦後民主主義は個人の平等を謳ってきたが、現実はどうだろうか。



法の下で平等なのは言うまでもないが、持てるものと持てないものとの不平等は厳然とある。機会の平等、結果の不平等、を許容できるかどうか。

先日昼下がりの公園のベンチで休んでいると、例の如くホームレスがやってきて、ごみ箱を漁り、食べ終わって捨てられた弁当の容器をもう一度開けて、わずかばかりの残菜をはずかしげもなく口にしていたが、その自然さに感心した。



人間も生物の一種に違いない、と思った。しかし、ホームレスにはなりたくない。狭いながらも貧乏ながらも楽しい我が家で暮らしていたい。そんな方には、

「ホームレス入門」（風樹茂 山と溪谷社）がおすすめ。

巻末の資料編から抜粋引用する。

ホームレスにならないために

- ・失業しない。
- ・酒、博打にうつつを抜かしすぎない。
- ・妻は夫に多くを期待しない。
- ・失業した場合、再就職には高望みしない。

・職がみつからず、家賃が払えなくなる前に速やかに生活保護の申請を出すこと。

・年金を支払うこと。支払えない場合は早めに支払免除の申請を出すこと。

年金をもらいながらも、ホームレスになっている人を酔夢亭は知っている。この人は、酒にうつつを抜かしている。羽振りの良い頃は女性にうつつを抜かしていたようである。

何はともかく、家を失うことは自分の拠点をなくすことだから、なんとしても住むところだけは確保しておきたいものである。



〔左は、栃木県立盲学校の小池上惇先生からご提供された原稿です。〕

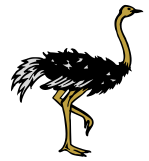
ダチヨウに乗った話

水戸市 賀川 友吉

今度の南アフリカの旅では、ダチヨウに乗る機会があるというので、常日頃物好きな私は行く前からわくわくしており、とても楽しみにしていた。鳥類では最も大きな鳥といわれるダチヨウだが、六〇キロ以上もある大人が本当に乗れるのかと疑問でもあった。二〇〇五年五月、いよいよその日がやって来た。

ここはケープタウンのダチヨウ牧場である。

金網で囲まれた広大な敷地の中に、一〇数羽だけが堂々と闊歩していた。全体としては五〇〇羽ほどいるようだ。以前、日本でのダチ



ヨウ園を訪ねたことがあった。その時はバスを降りると、強烈な糞の臭いに見舞われたものだが、ここでは特に異臭は感じなかった。さわやかな空気と広大な敷地のためだろうかそれとも清掃に力を入れているのだろうか。視覚障害者の一行一五人がまずダチヨウの骨格模型などが展示されている資料室に案内され、ダチヨウについての説明を受けた。

これを簡単に書いてみると、ダチヨウはアフリカやアラビアの砂漠に住む鳥で身長は約二mで、体重は一〇〇キロもあり、飛べない鳥の中では最も大きく時速四〇キロぐらいで走ることができるそうである。視力はきわめて良く、人間でいうなら四・〇とか八・〇もあるといわれている。美しい羽や皮は加工されて、装飾品やちり払い、ハンドバック、ベルトなどに製品化されている。肉は鶏に似ており、焼き鳥やハンバーグなどいろいろな料理に用いられる。卵は鳥類で最も大きく一、二キロもあり人が乗っても割れないそうである。

次に私たち一向はダチヨウに乗ることになり、乗り

場のほうに移動した。まず、係員が、棒の先に鉤型の金属のついた長い棒で、一羽のダチヨウの首を捕らえ、囲いのあるおりに連れて来た。そして頭に頭巾のような袋をかぶせるのである。こうするとダチヨウは目が見えないので、全然動かなくなる。もちろん、観光用に訓練されているのであろう。

そこへ私たちが一人ずつ誘導されて行き、台を使つて、ダチヨウの背中に馬乗りをするようにまたいで乗つたのである。あの長い二本の足、しかも、指はたつた二本とか、両方の指を合わせても四本の指で支えていることになる。それで人間も乗せるのだからすごいものだ。

全然びくともせずじつとしてるのには感心した。結局、乗せたまま動くことはなかった。一〇数秒間後に係員の合図で降りて、珍しい体験は無事に終わった。ダチヨウの背中は割合に大きく丸々しており、しつかりとしていた。子供のころ家で飼っていた山羊に乗ったことがあるがそれよりも大きく思えた。これを一五人が繰り返したのであるから仕事とはいえ、ダチヨウも疲れたであろう。

また、ダチヨウの食事のお手伝いもさせてもらった。小麦の加工品のような餌がみんなに一掴みずつ渡された。これを持っておりに近づくとダチヨウも寄ってきて、手のひらの上の餌を食べるのである。大きなくちばしで

つかれるのではないかと心配したが、ダチョウはついでに食べていたのはまたびっくりした。それから、ケータウンの草原をバスで通った時には野生のダチョウも何度か見ることができた。広い草原を悠々と歩いている光景はアフリカでなければ見られないものであろう。

ついでにチーターに触った話しを書こう。チーターといえど駆け足の速い動物としてだれもが知っている人気のある動物である。瞬間的には時速七〇キロで走るとか、自動車並である。体毛には、豹のような斑点がある猫族であり、大きさは大型の犬ぐらいであった。オーストラリアに行くと、良くコアラを抱かせる観光があるが、ここではチーターを触らせてくれるのだ。



広いおりの中で係員が寝そべったチーターの首の付近に手をおいている。そこへ私たちが一人ずつ誘導されて行き、腰をかがめて触るのである。頭は撫でてはいけないことになっていたので、背中と見事な尻尾をやさしく撫でてきた。とても柔らかくすべすべした感じの良い毛並みだった。チーターは係員の命令に従いとてもおとなしくしており、私の手には体温と静かな呼吸が感じられた。写真機を持った人たちはそれぞれその光景をフィルムに収めていたようである。私はチーターは動物であ

るからいつ怒り出して逃げ出しはしないかと少しは気になったが全員何事もなかった。聞くところによると1日の労働時間は、休みを入れながら四時間の拘束とか、ストレスを考慮してそのように決められているようである。日本ではちよつと不可能な体験、少しでもみなさんの参考になれば幸いである。

〈差別語・不快語〉考(3)

岡田 健嗣

《(前略) (獄中でどんな本を読んでいたのですか?) / 「太平記」は南北朝の戦乱時代を描いていますが、勝ち残った者の視点だけから歴史を描くのではなく、裏切られた失意の中で死んでいった者たちの思いが重層的に書き込まれています。それが獄中で読むと実にリアリティーがあるんですね。/ いつも鈴木宗男さんのそばにいて、土下座までして「浮くも沈むも先生と一緒にです」と言っていた外務官僚たちが、一転して追い落としに回った。私にも「佐藤君、君が骨になっても、骨は拾うよ」と言っていたのが、半分しか約束は守らない。骨になるところを見ていただけで、拾うことはしない。「太平記」を読んで悟りました。そういう人間は昔からいたんだ、と。

／ヘーゲルの「精神現象学」からは、ユーモアの精神を学びましたね。奇異に聞こえるかもしれませんが、あそこでヘーゲルが書いていることは、「当事者」にとつては深刻な問題が、「学理的反省者」一学問的研究をした人間が突き放してみた場合一には滑稽に映るということ

す。／（中略）（外務省では「情報のプロ」として知られました。情報収集をする上で、読書体験は役に立ったのでしようか？）／その通りです。どこの国でも情報の仕事をやっている人は、小説も本も大好きです。本ほど安い値段で、かつ短時間で情報が入るものはありませんからね。／それに情報を得るのは人間対人間の勝負です。そのためには自分の背景にどれだけ知識をつけているかが問われる。「〇〇七」のようなアクションよりも必要なのは知的な素養なんです。ですから外国の情報機関が人材をリクルーティングするのは、まずアカデミズムの世界です。それと自分から売り込んでくる人間は絶対に採らない。見込みのある人間を見つけ、周囲から探りを入れていく。資質を見極めるときによくする質問が、「最近どんな本を読んだ？」というものです。読書傾向を聞くと、その人の思想やものの考え方の深さがわかりますから。／（略）日本でも戦前は陸軍中野学校では徹底的に本を読ませていた。》『文學界』二〇〇五年五

月号、「私の読書遍歴 第二十四回、佐藤優氏へのインタビュー」、文藝春秋社

【佐藤優氏は、元代議士・鈴木宗男氏の背任事件に連座した嫌疑で、現在公判中の外務官僚です。】

三

前回・前々回と、『文盲』の語の使用から、〈差別語〉あるいは〈不快語〉が何かを、考えて来た。戦後の我が国の世界との関係の持ち方から、民主主義とそこに根差す社会制度や慣習や、様々なスタンダードの導入から、それ「らしい」国家像 社会像が提出されて、またそれらが現実化されて来ているように見られたが、舶来品の悲しさか、土壌に根付く前に、その異質性を露呈する結果となることかしばしばであった。この『文盲』という語も、一時的には活字メディアから姿を消した。

しかし近年、そここに使用されるケースが見られるのである。どうして姿を消したか、なぜまた使用されることになったのか、私は関心を持った。それはちょうど、私が生を受けてから今日に至るまでに起こった現象であつて、その泡沫のごとき現象を、取り敢えずの理由――差別的言辞はよろしくない――とともに、目の当たりにして来たからであろう。

戦後民主主義の実現への理念として提唱されたの

が、言うまでもなく（基本的人権）であつた。それによつて義務教育と社会福祉が最も脚光を浴びることとなつた。「義務教育」とは、子供に教育を授ける（義務）のことで、国家や公共自治体や、全ての行政主体に課せられた（義務）なのだという。教育を受ける、当事者の『義務』ではなく、教育を受けさせる、親などの保護者の『義務』でもない。社会に課せられた責務と位置付けているのである。

それによつて私たち視覚障害者も、他の身体障害者と同様に、一九五五年を境に、就学率がぐんと伸びたのである。取り敢えず形の上では、特殊な学習環境であつたり、漢字の習得が図られなかつたりということはある。一般の子供たちと同様に、学校で勉強できるようにした、というのである。

「社会福祉」の分野でも、同様の動きがあつた。

社会福祉を支える理念は、「ノーマライゼーション」と呼ばれるヨーロッパで生まれて、アメリカで育つた思想である。この「ノーマライゼーション」とは、身体的・精神的・知的な障害に基づく社会的なハンディキャップを、社会の側で補おうというものである。そのためには、それらの障害が何であるか、その障害によるハンディとはどういうものであるかを、よく知る必要がある。

つまりこの、「よく知る必要」というのが、「ノーマライゼーション」の一步だというのである。注意すべきは、この「ノーマライゼーション」には、通用する訳語がない。

翻訳は困難ではないはずだが、この語ばかりでなく、社会福祉の用語には、カタカナが使用されるケースが多い。と言うのは、福祉の理念の流れが、欧↓米↓日本であつて、その間にも理念そのものの変化や、地域の固有の捉え方や考え方の相違が、用語の解釈の目まぐるしい変化と相俟つて、外来語のままに置くことで、何時しか解釈すらその必要を感じさせられなくなつていくことに因るのではないだろうか。

事実この「ノーマライゼーション」の語も、ここに紹介した理解に先立つて、「ノーマライズ」する対象は「アブノーマル」であるので、社会福祉の対象である身体、精神、知的の障害者が「アブノーマル」と位置付けることを当然としていたのである。

つまり「ノーマライゼーション」の意味するところが、百八十度方向を変えて、かつては「アブノーマル」な障害者を「ノーマライズ」することと解されていたのが、現在では社会を変えて皆が暮らし易いものにするということという意味に解されるようになった。これは「義務教育」の理解の変化と同様に、極めてドラスティクな変化と言

つてよいのではないだろうか。

しかしこゝが大事なところで、「義務教育」の理解も決して普遍的ではない。その証拠に、『広辞苑』など国語辞典には、国や行政諸団体に課せられた「義務」との記載はない。同様に「ノーマライゼーション」の語も、「社会の変革」と謳うものはないのであつて、右に述べた理解は、一部教育・福祉の専門分野にのみ通用する理念の様相を呈しているのである。

〈差別語〉や〈不快語〉をなくそうという動きも、『人權』に基づく「差別否定」の理念に負つて起こつたものに違いない。「人類平等」であれば、障害者も人間、そうであるならば健常者と同等の権利と待遇の下に生活できてよいのではないか。

ならばさらに、不当な取り扱いには抗議してもよいのではないか、中でも「差別」的な言葉による暴力はなかくして欲しいものだ、と言う。常用漢字の『盲』の訓読みから、「めくら」を削除して欲しいという要求も、そんなところから発している。

前回私は、「識字」のアントニムである「文盲」という語は、「識字」や「非識字」とは異なつて、「盲」の語をメタファとした熟語だと書いた。この「盲」という文字・言葉は、単に「目が見えない」ことだけを指したものでな

い。こゝでは「暗い、理解の乏しい、暗愚な者」等々の意味を含んでいて、「文盲」とは、「文」に暗く、世の中の理解が拙劣で、思考力と判断力に乏しい、愚かな存在だということを含意した語だと言つた。

そしてこの文脈から言えば、「盲」である視覚障害者は愚かな存在だとするこの熟語に対して私は、「そんなことはない」と、否定しなければならぬはずであつた。が、残念ながらそうではないのである。そして「識字」のアントニムである「非識字」が、未だ自立した熟語にはなり得ていないことから、そのシノニムである「文盲」が、時折顔を覗かせることとなつたのであろう、と理解する。

吉本隆明氏の言語論の柱に、『自己表出』と『指示表出』がある。言葉の性格には、この二つの側面があるといふのである。どんな言葉でも、口から発せられる、あるいは文字として記された途端に、発した当事者が込めた意味や思いと、他の社会の構成員に理解し得る、共有される意味とが、その言葉を性格付けると言う。

そして『自己表出性』と『指示表出性』がその語に占める割合によつて、その語の性格も決まつて来る、私はそう理解している。とりわけメタファを含んだ語は『自己表出性』が強い。

しかしこの『自己表出性』は、年月を経るに従つてその

性格を弱めて行き、それに反比例して『指示表出性』を強めて行く。その最もよい例が、『万葉集』などの和歌に見られる「枕詞」だと言う。

「枕詞」とは、地名や物事を修飾するもので、一定の決まった形を採る。「垂乳根の」は「母」にかかり、「足引きの」は「山」に、「青丹よし」は「奈良の都」にかかるという、決まった形式を採るものである。がこの修飾の形式の原初には、言語表現上、大きな飛躍があったのだと言う。

それが『メタファ』の発見で、「枕詞」はこのようにして生まれたと言う。「青丹よし奈良の都」は、その初発には、平城京を讚美する最上級の言語表現であった。つまり、都を讚める意識の下に、この「青丹よし……」のフレーズが生まれたのである。

その後数十年、数百年を経て、「青丹よし」が繰り返して用いられて、必ず「奈良の都」に先んじて置かれることが決まりとなると、聴衆や読者が、「奈良の都」のフレーズに触れる前に、「奈良の都」のことだな、と理解できるようになる。このことは何も「青丹よし」ばかりではなく、他の喩的な表現にも同様に当てはまるとともに、これが「枕詞」の成立のプロセスでもあると言う。

「自己表出」の極限には、いわゆる「意味」を成さな

い表出が想定される。またその反対の「指示表出」の極限には、「意味」が意味として機能しない領域が想定される。

全ての言語は、この広がりどどこかに位置を占めていて、先の「盲」に関する意味付けも、この領域の範囲に位置付けることができる。

ところで「盲」がメタファとして用いられるに当たって、いったいどのようにして「指示性」を獲得したのであるろうか。「暗い」とか「愚か」とか言っても、人々にそう思わせる何かがなければそのような意味には至らないはずだ。前回ほんの僅かではあるが、「めくら、盲」を含んだ熟語を抜き出して見た。驚くほどの数に上ることが分かったところでその作業は断念したのだが、少なくとも人々は、「視覚」を失うことへの恐怖、あるいは畏怖の念を、強く持つていることが想像される。

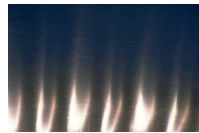
そこに「暗い・愚か」という観念が重なれば、大いに畏怖の念を強くするに違いない。どうしてそのような観念が成立したのであろうか。考えられることは二つである。

その一つは、実際に生活する視覚障害者を目の当たりに観察して、育てたものである。これに関しては、後で述べる。

もう一つは、自身が失明することを想像してのことである。これは、高年齢化と生活習慣病の罹患率の高まりという現実から、決して可能性の低くないこともあつて、大いに想像をたくましくしているように見える。

たとえば、視覚障害は物理的には「暗く」はないのだが、「暗い」ものと想像する。光があつて初めて光のない世界を「暗い」と感じる。

その光のない世界にいる視覚障害者は、光のない「暗さ」を感受する必要すらない。



そのような者を「暗い」世界の住人と解するのは本当は間違いなのだが、手で目を覆うことで視覚の障害を想像するとすれば、その辺りが限界なのかもしれない。とすれば光のないことを抗し得ない現実として想像すれば、やはり失明の状態は、暗く取り留めない、極めて頼りない世界に投げ込まれる恐怖を覚えても、これは無理のないところである。

先に戻つて、周辺に生活する視覚障害者への観察に基づき観念は、どのようにして生まれ育つのであろうか。

一九八〇年代の初頭に、視覚障害者の漢点字への関

心がピークに達した。漢字を習得する機会を得られなかった者にとつて、それは本当に希望であつた。

同じころ、当時日本ライトハウスの所長を務めておられた川越利信さんが、「情報障害」という用語を用いて、「視覚障害者の障害は、畢竟、情報摂取の障害である。その障害を如何に克服するかが、社会参画の鍵だ。」と提唱された。

私はその通りと肯つたのだが、後に思えば、かなり勘違いをしていたようである。と言うのは、私たちの年代までの情報摂取の常識は、冒頭に引用した佐藤優さんの言われるように、読書の質が決めるというものであつた。

どんな本を読んでいるかということ、どういう考え方をする人であるかが分かると考えていたのである。そこでこの「情報障害」という用語、そのような実態を克服するには、漢字の習得を含めた読書環境の改善しかないし、川越さんは、それを意図してこのような発言をしておられるのであろう、と私は解したのである。

そして現在でもなお、川越さんのご発言に関しては、そのような受け止め方でよかつたと考えている。

しかし実際は誠に残念なことに、そうは動かなかつた。つまり、「情報」を、単に新規な、向こう側からやつ

て来る、受動的なものとして捉えるのが一般であった。当時提出されたニーズの多くは、晴眼者の世界で日常的に発行されている、新聞や雑誌など活字メディアからのニーズであって、それを「晴眼者と同時に受け取ること」が最新の情報を手にすることであるとされたのである。

それが最も価値が高いとされたのである。

その意味からすれば、不十分ではあっても現在ではインターネットを駆使して、多くのメディアの情報に触れることができるようになってきているのであるから、「情報障害」は、かなりのところ克服されたと言えるであろう。



こういう視覚障害者が周辺にいる人々にして見れば、このような受動的な姿を視覚障害者の真相と見るとしても、これも無理のないところである。

こういう現状からすれば、「文盲」、「群盲撫象」などの用語は、〈差別語〉と呼ばれながらもなお残存するであろうし、〈差別語〉だから使つてはいけないという従来の主張も、徐々に力を失つて行くであろう。

なぜなら、実態の裏打ちを失うなら使い方も変容するであろうが、実際には一般の想像を覆すことの困難さは否めないからである。

〈差別語・不快語〉について考えるということは、「平等」の理念からだけでは何も始まらないことを理解することを理解するところに落ち着くことになった。

人間社会の複雑さを思い知らされただけかもしれない。がやはり、我が国を代表するメディアの皆さんには、『文盲』という言葉を使つてはいけないとすれば、他にどんな言葉がありますか？」と、読者に聞くようなことはしないでいただきたいし、「群盲象を撫でる」と書けないからと言って、「目をつむつて象を撫でる」などと、あり得ない譬喩を捏造していただきたいくないというのが結論である。

もう一言付言するならば、〈差別〉という語も、ここでは「あつてはいけないこと」としての捉え方で進めて来たが、ビジネスの世界では、〈差別化〉として、競争相手の商品とは一味違う内容を提供することを指す語として用いられている。

つまり言葉とは、幾様にも使い分けられるものである。私たちもその幅を熟知すべく努力することが求められているであろう。

ご報告とご案内

本号の活字版が発行されるころは、立秋も過ぎ、季節としては秋となるはずですが、例年のこととは言え、厳しい暑気の遠ざかるには、まだまだ時日がかかるようです。

本会の活動に関するご報告その他です。

漢点字訳ボランテニア講座を行いました。

六月一五日、二二日、二九日、七月六日の四週・四回に渡って、本会主催の、漢点字訳ボランテニア講座を行いました。

沢山のご応募をいただいて、急遽広い部屋に会場を移すなど、当初から準備が行き届かない憾みはありましたが、熱心にご受講いただいで、現在



約三十名の新会員をお迎えすることができました。

心より感謝申し上げます。

四回の講座と申しますのは、もとより不十分な想定で、概論をご理解いただくところまでと考えました。

終了後は直ちに実際の活動にご参加いただいで、入力と校正という、会員相互の連絡網の構築を必要とする活動を、体験していただいております。

受講者の皆さん、現在では新会員となつていただきました皆さん、大変熱心に取り組んで下さっております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

漢点字講習会

この五月一日を今年度の初回とする、漢点字講習会を行っております。

横浜市のご後援をいただいて、一昨年から三年目に入りました。

通信制を基本的に置いて、奇数月・隔月に教室を設定しております。

今年度も二回を終えました。

受講者の皆さん、漢点字を習得して、漢字の世界に参加なさりたいの思いを、熱心に発揮されておられます。頑張ってください。



国会図書館への、漢点字書の納入について

今回の漢点字訳ボランティア講座をご受講下さりましたお一人から、国立国会図書館に、発行書籍を資料として受け入れる制度があつて、漢点字書も、受け入れて下さるはずとの情報をいただきました。

早速確認させていただきました。

現在納入に当たって、手順の最初の、選書を行っているところです。

漢点字のボランティアの一助となることは、間違いありません。大変ありがとうございます。

東京でのボランティア講座

「うずれば」の後記を、ご参照下さい。

E-MAIL:

eib_okada@yhb.ne.jp

URL:

<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

表紙絵

岡 稲子



次回の発行は十月十五日です
※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。